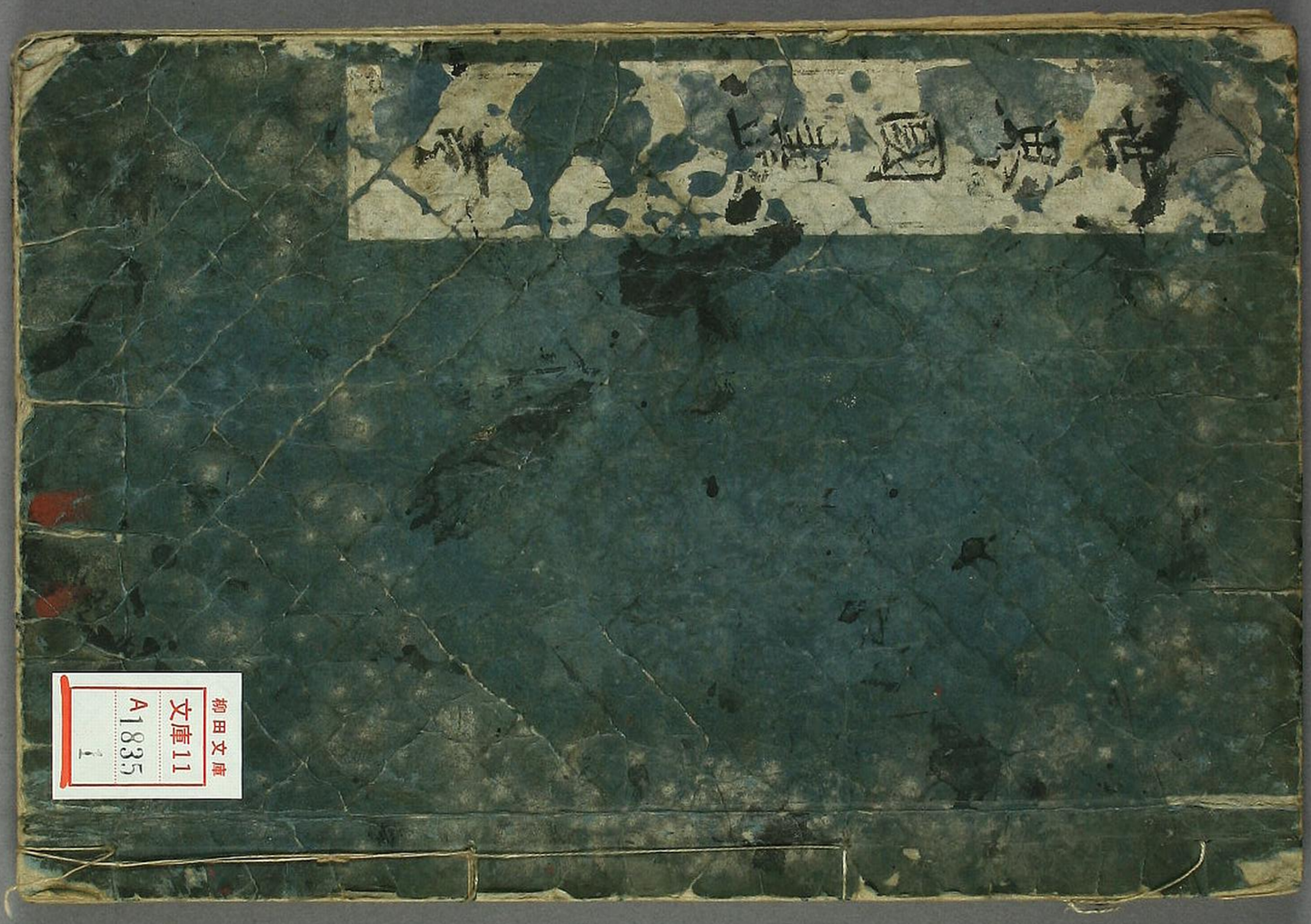


柳田文庫
文庫11
A1835
1

文庫11
A 1835
1

明治二年己巳初冬

明治四年甲申二月再刻

48 7219

世界國盡序

諺ニ云ク災ハ下ヨリ起ルト抑災害ハ幸福モ亦随テ下ヨリ生ス可シ然ハ則チ天下ノ禍福ハ其源蓋シ他ニアラス國民一般ノ知愚ニ係ルヿ推シテ知ルベキノミ今茲ニ世界國盡ノ著アルモ専ラ兒童婦女子ノ輩ヲシテ世界ノ形勢ヲ解セシメ其知識ノ端緒ヲ開キ以テ天下幸福ノ基ヲ立ントスルノ微意ノミ書成ルニ及ヒ合衆國ニウヨルク州ノ士人ワルプランク

氏ノ文章ヲ翻譯シテ序文ニ代ルヿ左ノ如シ

世ノ文人筆ヲ下シテ人ノ功業ヲ表スルモノ常ニ其文ノ拙エヲ慼ニシ或ハ經濟家ノ知ヿヲ譽メ或ハ武將ノ勇膽ヲ稱シ或ハ說客ノ明辯ヲ贊シ字句秀英文章華麗自カラ人ヲシテ功名青雲ノ趣ヲ想像セシムルモノ尠カラス然リト雖ヒ事實天下ノ裨益ヲ謀リ世ノ爲ニ功ヲ成スノ大小如何ヲ論スルトハ誰カ學校教師ノ右ニ出ルモノアラン何物カ人民教育

ノ重大ナルニ若カシ

我合衆國ノ諸州文明寛大ノ趣旨ニ基キ民間ニ小學校ノ法ヲ設ケ毎戸毎人其教育ヲ被ラサルモノナシ例ヘハ「ニウヨルク」州ニ於テハ闔州ヲ九千區ニ分チ毎一區必ス一所ノ學校ヲ開テ教ヲ授ケリ但シ五十所ノ大學校及ヒ許多ノ私塾ハ此數ノ外ナリ

此學校ニ出入スル兒童ノ數五十萬人ニ下ラス此外上級ノ學校ニ於テ教ヲ受ル少年モ九

千乃至一萬人ノ數アリコレニ由テ考レハ人間交際ノ大事ニ関シ或ハ益ヲ為シ或ハ害ヲ為シ其禍福ノ源タル可キモノハ教授先生ノ風俗ト其人品ノ高下ニ在ルヿ知ル可シ豈ニレヲ至重ノ任ト云サル可ケンヤ

近来ニウヨルクニ於テ人物ヲ選擧スルヿアリテ其時入札ヲ投シタルモノ三十余萬人ナリシ（奉行ナドノ選擧ナラン）蓋シ甫後三十年ノ星霜ヲ過キナハ此人員ノ大半ハ物故シテ継テ其身分

ニ代リ其職ヲ奉スル者ハ他ナシ方今當州内ニ在テ一萬人ノ教師ニ隨從シ初學入門ノ教ヲ受ル児童ナラン

我國人衆庶一般相為ニスルノ公法ヲ以テ國體ヲ成シ其國ニ益アルヿ甚洪大ナリ然ルニ此國益ヲ為ス所ノ源ハ唯前条ノ一事ノミナラス他ニ又功徳ノ大ナルモノアリ其大ナル者トハ何ソヤ慈母ノ教育即是ナリ政府其體裁ヲ寛大ニスト雖モ議政其法ヲ巧ニスト雖

正治國ノ君子經濟ノ為ニ策畧ヲ運ラスモ盡忠ノ義士報國ノ為ニ身ヲ殉スルモ其國ニ益スル所ノ實功ヲ論スレハ母ノ子ニ教ルノ功德ニ及ハサルヿ遠シ

後世若シ我共和政治ノ人民其先人ノ冨強ヲ承ケテ其名其實ニ恥サルモノアラハ此人物ハ必ス母ノ賢德ト知識トニ由テ然ル者ナラン先ツ人ノ心ニ慈悲温和ノ情ヲ起シテ其習慣ヲ成シ孝ノ道ニ先入セシメテ其方向ヲ正タシ人類ノ職分ヲ知ラシメ萬物ノ靈タル責ヲ辨シ以テ明德ノ門ニ入ラシムルノ道ハ唯慈母ノ鞠育教養ニ由テ得ヘキナリ

前条ノ如ク慈母ノ教育ハ其子ノ本心ヲ誘導シ純精無雜神靈微妙ナルモノト云フ可シ此教ニ亜テ功ヲ奏スルモノハ學校教師ノ教ナリ其功德亦小ナラス今此國ニ於テ學校ノ增加スルヿ毎年千ヲ以テ計フ此學校ニ在テ教ヲ授ル者盡ク皆博識ノ士ニシテ腐儒ノ臭ヲ

去リ小説ニ惑ハスシテ真理ノ趣ヲ解シ其道ヲ尊ヒ其教ヲ好ミ當務ノ職ヲ達シテ節義ヲ守リ以テ風化ノ徳ヲ盛ニセハ其恩ノ生靈ニ及フ所實ニ鴻大無窮ナル可シ

明治二年
己巳八月

福澤諭吉　譯

一此書は世間よりする翻譯書の風と異なれども其實ハ皆英吉利亜米利加より開版したる地理書歴史類を取集めその内より肝要の處だけ通俗に譯したるものにて私の作意ハ毫も交へず

一西洋にハ年号なく其國の宗旨の改りたる年を元年と定め明治二年ハ彼千八百六十九年に當る

一物の数ハ一、十、百、千、万、十万、百万、千万、一億、十億、百億と十倍づゝ位すて次第ゑ計へ上るなり

一英の一里ハ千七百六十「やゞ」すて一「や」ゞは日本れ三尺少し余り故ゑ其一里ハ日本乃十四丁四十間余ゑ當る英の地理の里法ハ少し長く其一里は二千二十五「やゞ」ゑ當る即ち南北緯度の一度を六十ゑ分ち其一分の長さなり

一地名人名等は西洋の横文字を讀て畧その音ゑ近き縦文字を當るまとなれハ古来翻譯者れ思々ゑ色々乃文字を用ひ同ド土地すても二も三も其名ゑ似たり又或ハ唐人の翻譯書を見て其譯字を真似したるもゆりされハ唐れ文字の唐音ゑ以て西洋れ字音ゑ當たるゆへ唐音ゑ明るゝ學者達ゑハ分るべけれども我々共ゑ少しも分らぬ故ゑ此書中ゑハ勉て日本人ゑ分り易き文字ゑ用るゆふゑ

せり實ハいろは計り用ても濟むべき筈なれ
ども本字を記して脱へ假名を附れハ記憶を
ふ便利なり譬へは南亜米利加はべ以り巴
うといふ處へ平柳と記しなは勘平の平れ
字と楊柳れ柳の字なりと憶ふ記して牧ふへ
易しハ固より論もなく雜輕乃雜の字
は雜慶の雜の字なり論頓の論の字ハ論語の
論れ字なり大抵ハれ逃向して譯字を下した
れども多くれ譯書中ふ普通なる文字ハ無理

なりとも其まゝ用て傍ふ假名を附しれバ讀
者其本字を當よせしして假名の方を記憶を
爲し

一

近年までは日本人も英文を讀み得て和蘭の
書のを翻譯せしゆへ地名も蘭人の唱を
英人の唱と同ときるを以て譯字の相異
なるものあり譬へハ昔日蘭書の翻譯文中ふ
窩々所徳禮幾と記しなるものを今ハ墺地利
といひ古の獨逸を今ハ日耳曼といふ如き

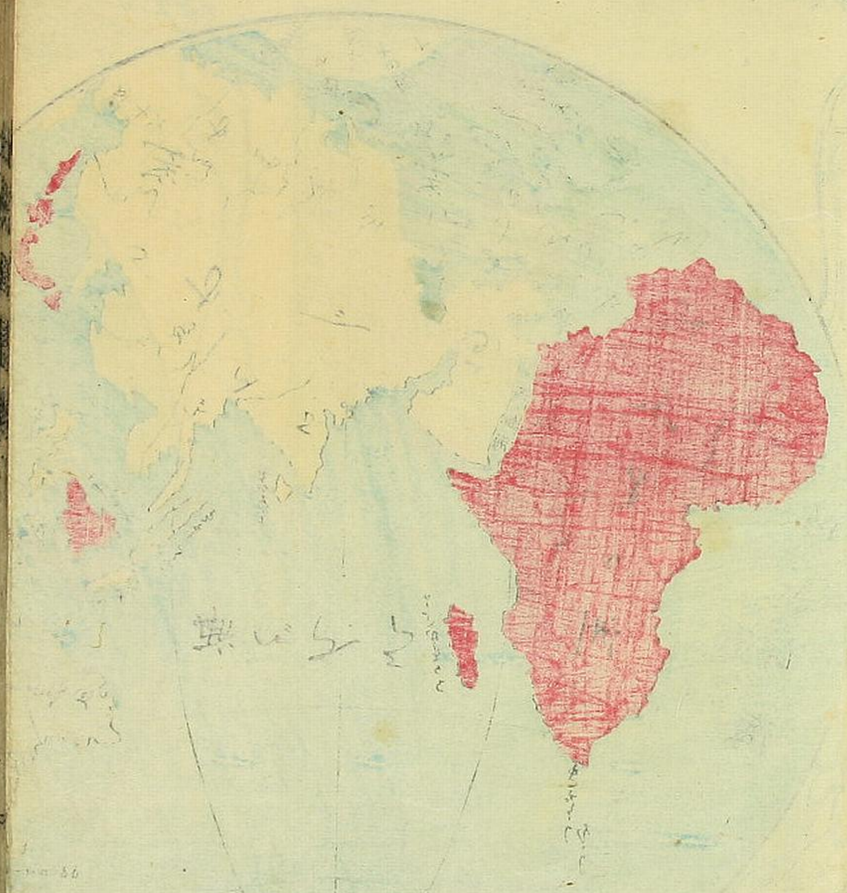
ハ事實ヨ於テ變ラントス唯近來ハ英書流
行ヨ英の唱ヨ從ふのみ
一地名人名海河等の名ヨモ其文字の上下ヘ「」
の如き印を附て區別せり
一書中はひふへほの假名文字ヨ圓き濁点を附
けてぱぴぷぺぽと記しなるはりはれいはひ
ふへほまもはりけ又ばびぶべぼまもはりけ
のぱぴぷぺぽまもいるぺぽの音まり

目錄

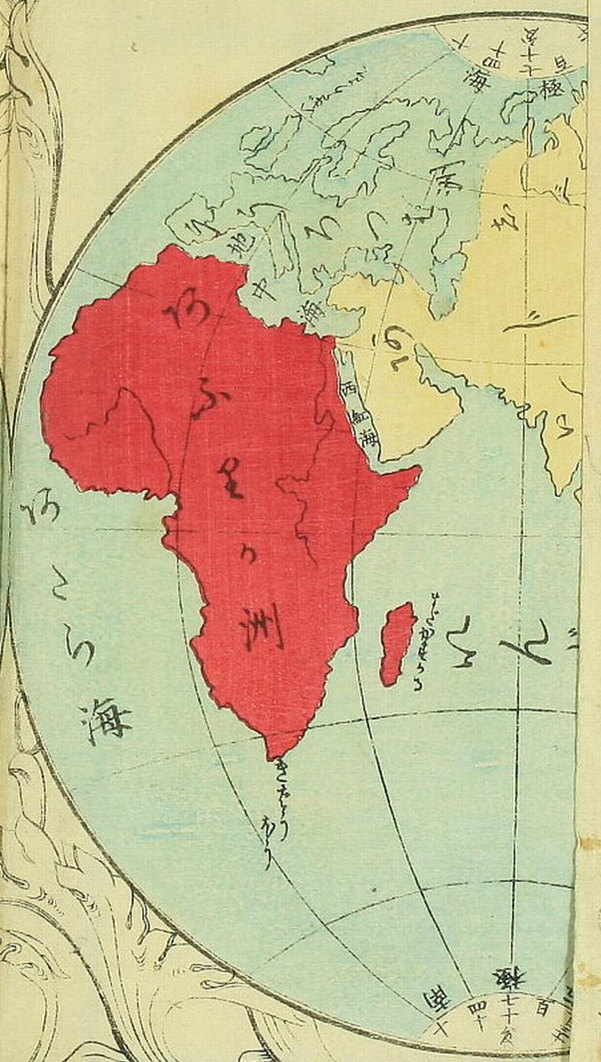
一の巻
裳端
亜細亜洲
同頭書圖入
二の巻
阿非利加洲
同頭書圖入
三の巻

歐羅巴洲
同頭書圖入
四の巻
北亜米利加洲
同頭書圖入
五の巻
南亜米利加洲
同頭書圖入
大洋洲
同頭書圖入
六の巻
地理學の總論
天文の地學
自然の地學
人間の地學

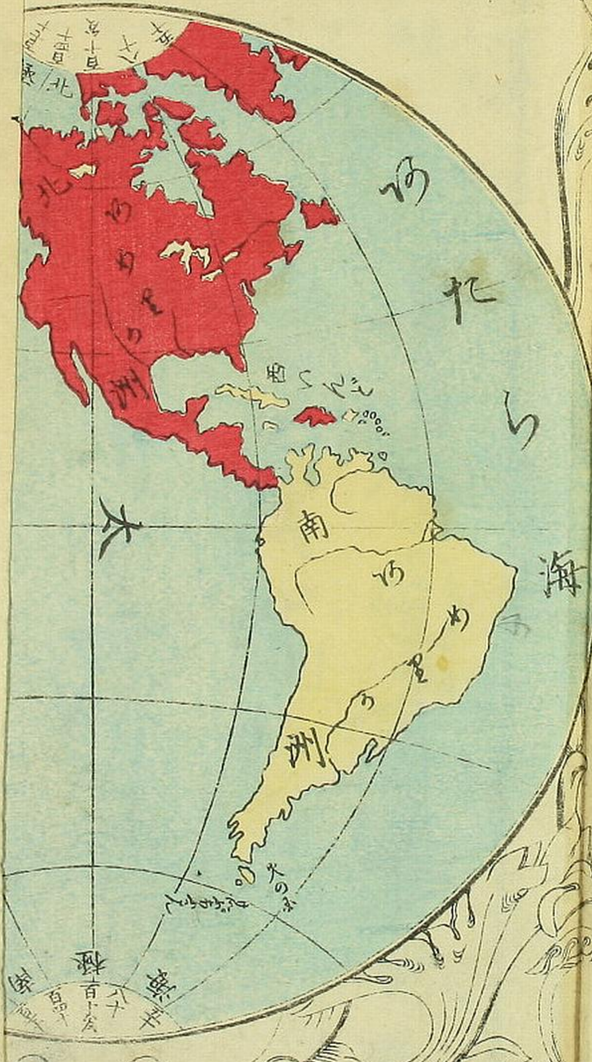
目録終

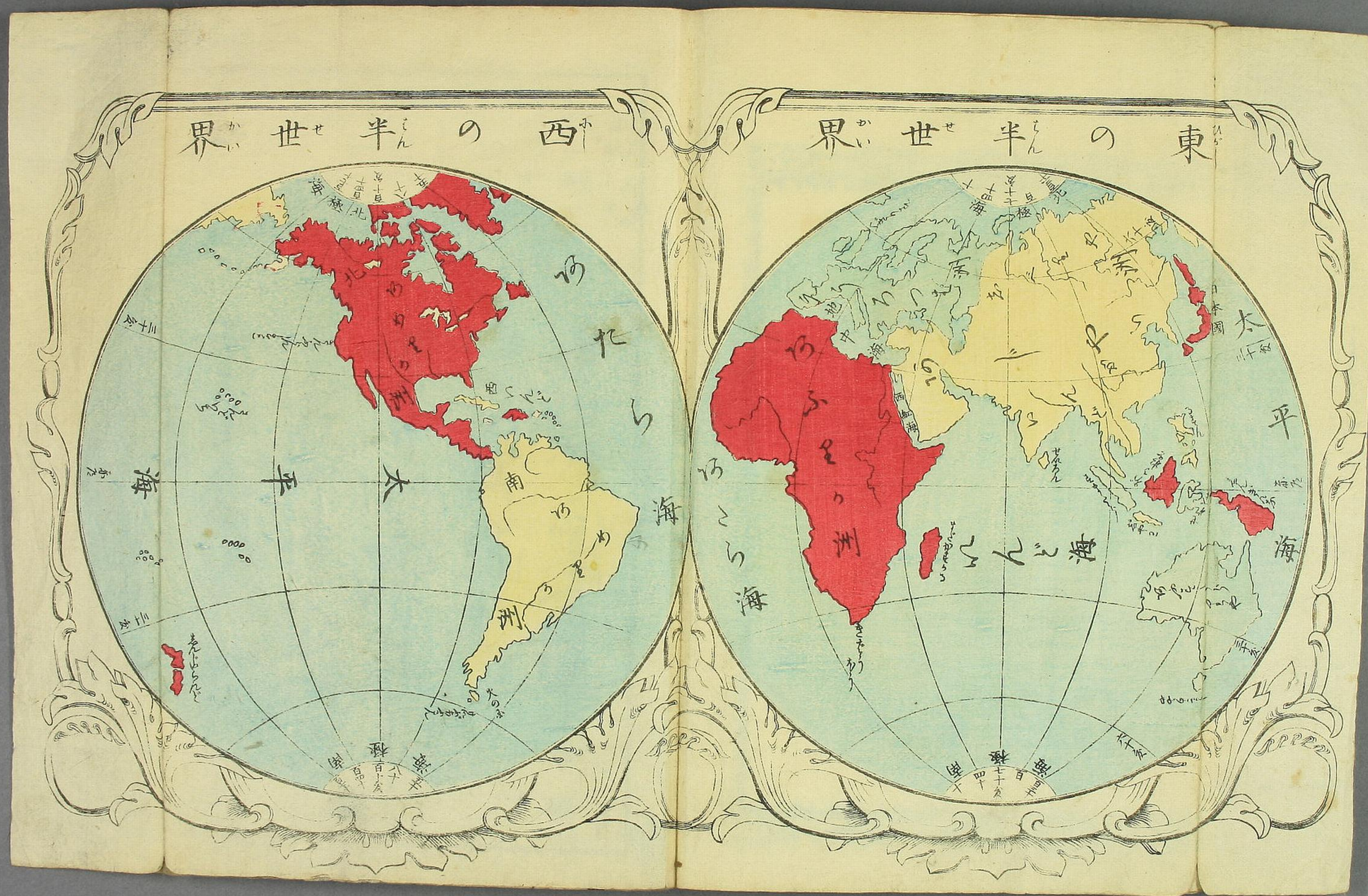

東洋世界

半世界



半の西




西の半世界
東の半世界
北極海
南極海
太平洋
大西洋
南洋
日本國
支那
印度
亞細亞
亞弗利加
亞米利加
南亞米利加
亞墨利加
亞剌比亞
地中海
紅海
西洋海
東洋海
南極

世界人民の事

世界の廣さハ英吉利の一里四方を一坪ゝ立九二億の坪數ゝこまを四ゝかけ三分ハ海ゝして一分ハ陸なり故ゝ人の住ふ陸の廣さハ五千萬坪あり但し英吉利の一里

世界國盡

世界國盡

發端

世界ゝ廣ゝ美國

世界ゝ廣ゝ美國

八日の十四町四十三間に當る

世界中の人の數は凡十億に近し國々の土風に由て面色も同じからぬ知愚も一樣なれども其區別を五種に分ち世界中に多少の割合左の如し

亞細亞「アジア」阿非利加「アフリカ」歐羅巴「ヨーロッパ」北と南は五米利加「アメリカ」堺を隔てる大洋海に別て天洲大洋海に別て南は海

歐羅巴の人種は色白し其數四億二千萬人

亞細亞の人種は色少しく黃なり其數四億六千萬人

亞米利加の山に住へる人種は色赤し其數一千萬人

阿非利加の人種は色黑なり土地の風俗人情に變化し

色黑し其數七千萬人

大洋洲ハ住へる島人ハ茶色あり其數四千萬人

亞細亞洲の事

亞細亞の土地の廣さハ千五百五十萬坪人の數六億五千萬人

大洲の中ハて一

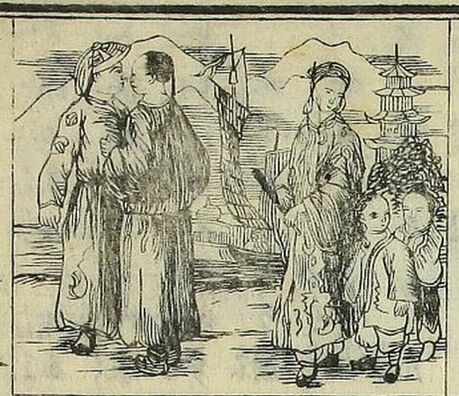
すんの大洲あり

廣き亞細亞の内ハた人の種類も色々ハいきども蒙古人の種とて其種族最も多し或ハこれを

亞細亞洲

西ハ地球ハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

亞細亞人種といふ
氣候も北方志邉里
屋の方ハ甚ど寒く
天竺の南ハ至もで
赤道近く甚だ熱し
禽獸草木そこもハ
準じて異あり
○支那の廣さハ五
百二十萬坪人の數
四億都の名を北京

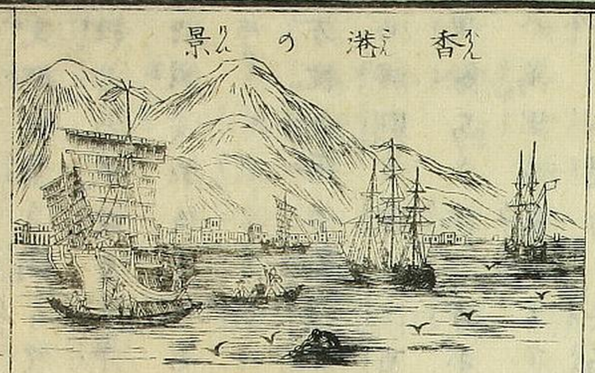


といふ國中の男子
ハ皆けし坊主あり
始て見る人ハハ甚
をろしく思ひ

「支那」ハ「亞細亞」の大
國にて形ハ長く地度
くみなり「印度」北に
魯西亞「亞」東のうちハ「大
平海」「漸戸」を隔て

支那の産物ハ絹布木綿瀬戸物其外象牙細工等ハ間物多し殊ニ茶ハこの國の銘産ゝて毎年外國へ積出すこと凡一億斤ゝ近しとハふ歐羅巴亞米利加ゝハ茶園ゝしその國々の人の用ゐる茶

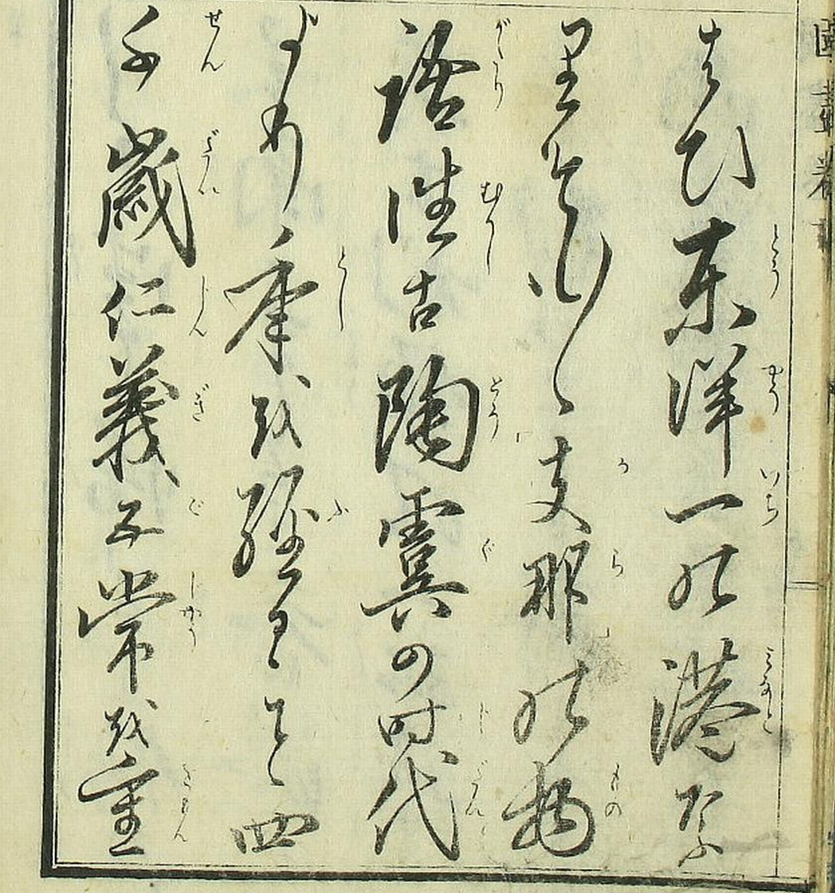
日本國九洲紀前ゝ
崎より支那の東
「上海」へ海路僅
岸の
三百里蒸氣船ゝ板
ゝ十日ゝ暇を費



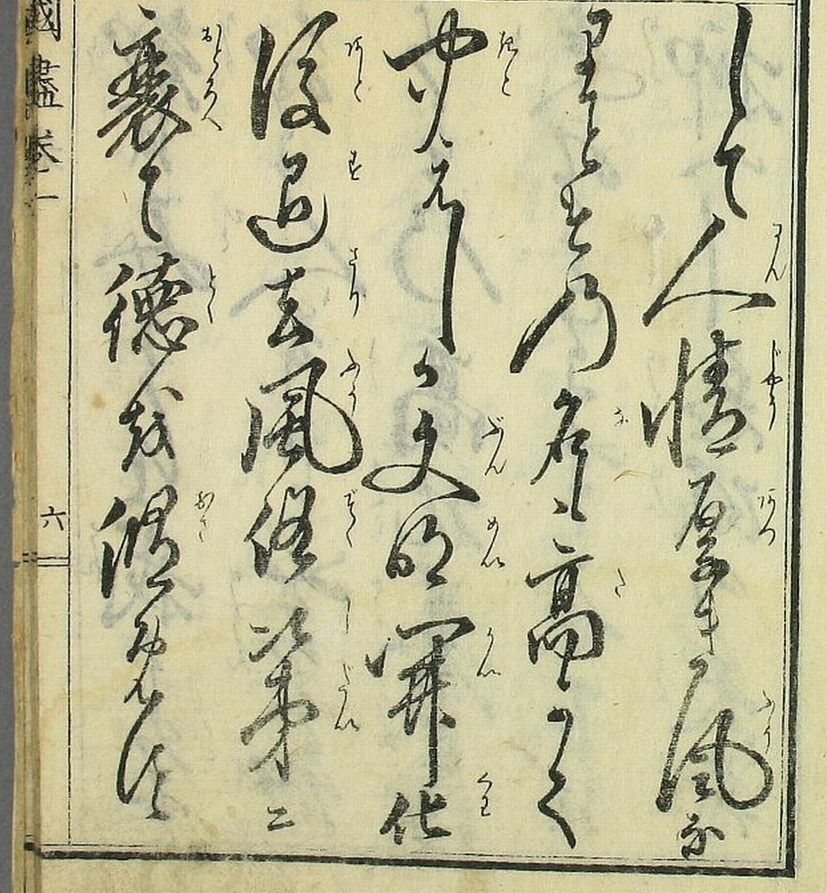
ハ支那と日本とを積出す品々

して陸に帰るを俗あ
南にまたる香港ハ
英吉利領ゝ一孤島
「ゝ」ゝ新
高貴繁昌地ゝ

支那ハ舊き國ゐて往昔ハ大造なる事を成したるものを北京ハ南の方杭州府ゟ通船の堀割を長さ三百里餘なり北の方ハ萬里の長城とて長き土堤にて其高さ一丈五尺ゟ三丈谷ゟ跨て山を越へ六百里の長さゟ及べて當時ハ固よ



り修覆もふく崩も次第なれども珍しき古跡とて西洋の人ハ折々見物まろ

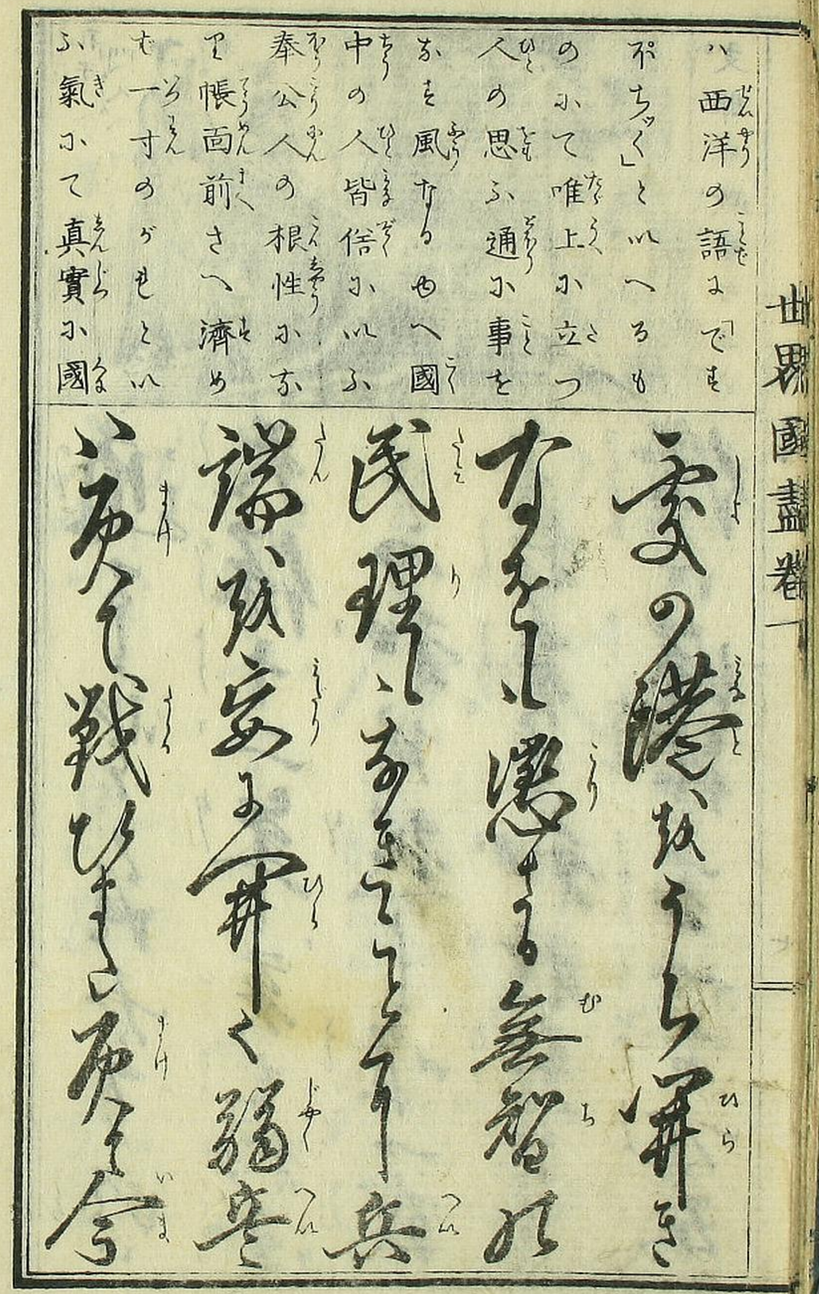


より此長城ハ二千年前秦の始皇帝が胡を防ぐたゝゟ築

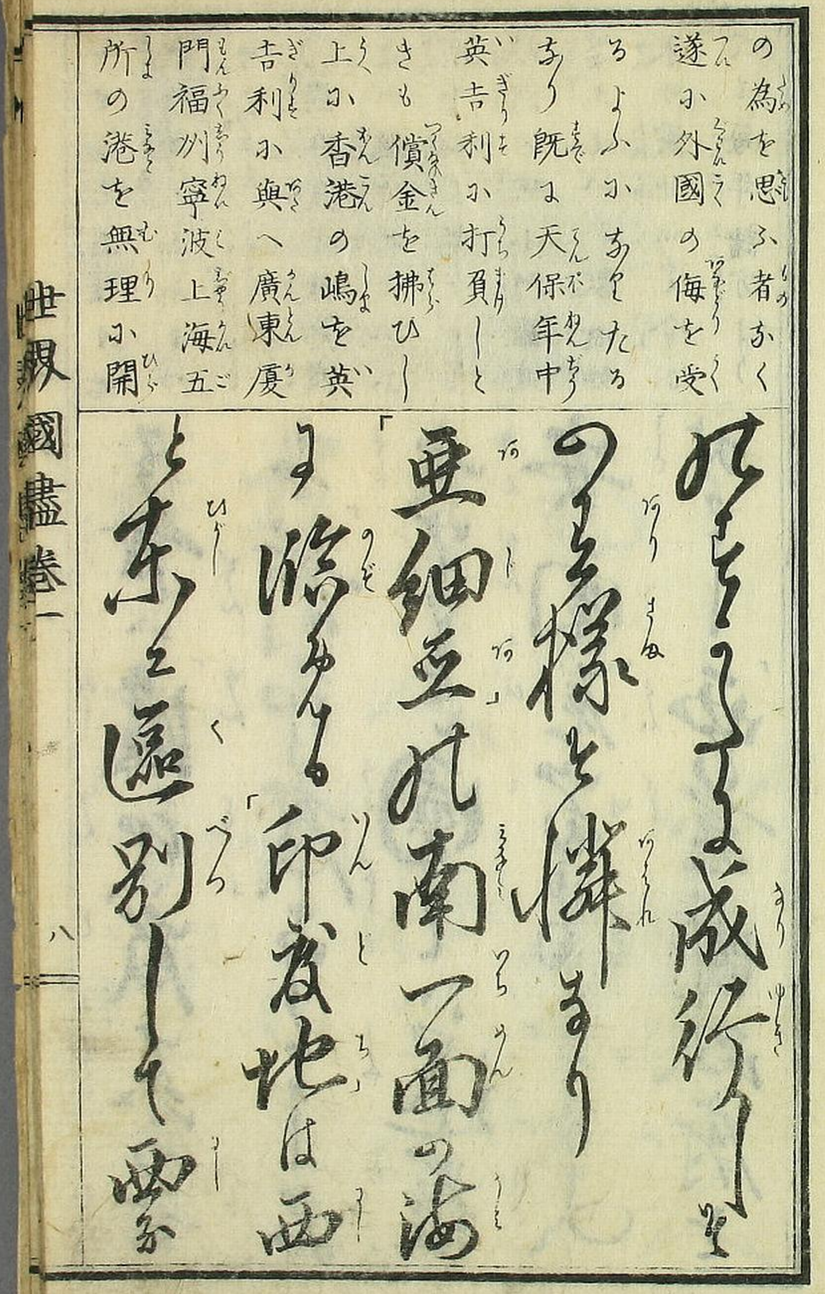
きしものあり
今より二千三百年
前支那に孔子といふ
へる人ひとり名高き
學者にて門人も多
く著作の書も段々
後の世に傳へ支那
は勿論日本にても
この人のことを聖
人として尊敬せ

支那の政事の立方

ハ西洋の語なり「でも
ぷちゃく」といへるも
のにて唯上に立つ
人の思ふ通ひ事を
なを風するのみへ國
中の人皆信ずるふ
奉公人の根性にて
ア帳面前さへ濟め
も一寸のがもといい
ふ氣にて真實に國



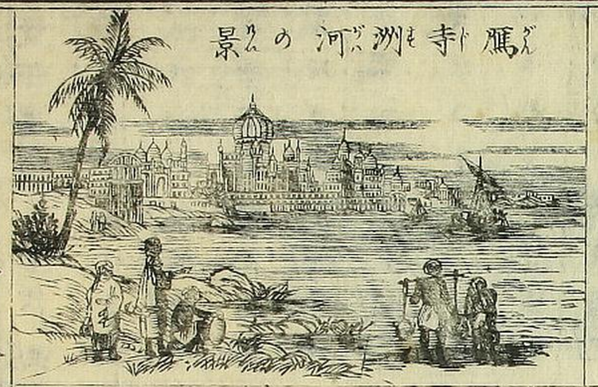
の為を思ふ者なく
遂に外國の侮を受
るよふになりたる
なり既に天保年中
英吉利に打負しと
きも償金を拂ひし
上に香港の嶋を英
吉利に與へ廣東廈
門福州寧波上海五
所の港を無理に開



うせらも其後も始終外國人ふふをつけらるる

○前印度と後印度とハ鴈寺洲といふ河を以て界とせる此河の畔ハ阿羅波婆土といふ釈迦如来の霊地なり今ハ毎年諸方より

参詣の人二十萬人の餘ありといふ



鴈寺洲河の景

「ハ後印度」

「前印度」

「暹羅」

「ハ暹羅」

「西洋國政府を

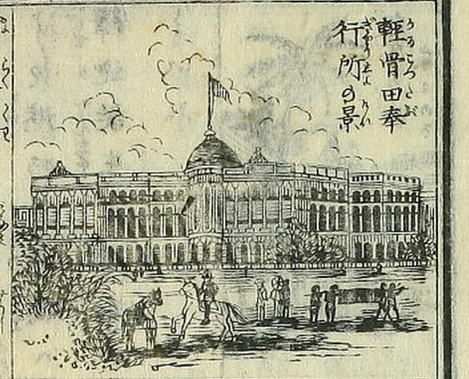
氣候西洋人ハ梅雨を受て

「暹羅」

「廣南滿の南」

後印度のこと西洋人ハ「ひんどき大
ん」といふ大抵殘らを英吉利領なを唯
其北の方か獨立國と唱へ英の支配を
受ざるもの二三國
ゐるのミ前印度も
西の方ハ英の支配
下あり

北滿蒙花ハ源慶
「多良嶋」とも對し
西僅う二千餘里間
北海ハ「潛蒙花」の

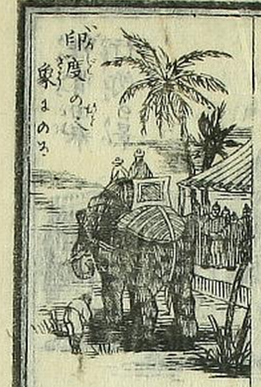


輕骨田奉行所の景

滿落花の南の端ハ
新賀堀といふ小島
ゐり英吉利領の港
ハて諸國の船の立

瀬戸と名付て茶ハ乃
船の往来ハ賑しく
瀬戸ハ出ずハ「印度海」
北南ハ雜種の人海
深く人ハ「小栗の河」

寄る所あり
後印度の南の端か
を西論といふ島ハ
ヲ同じく英領かて
より港ハヲ此嶋ハ
釋迦誕生の地あり
といふ



の本營ニ軍艦を
ハ種骨田「英吉利領の
惣奉行「印度」北方を
支配して軍艦商船
数多の「亜細亜」に英

印度の産物ハ材木
米麥砂糖蜀黍麻鹽
烟草胡椒阿片黄金
鉄銅珠玉の類且こ
の地ハ春夏冬の
差別なき暖國かて
色々珍らしき菓實
多し獣類ハ獅子
犀象虎又恐ろしき
大蛇蟒あども山ハ

吉利」の威勢こゝ
くに於ても前段印
度」ハ領地とを
「印度」の西の國とを
「阿英賀仁源丹玉留

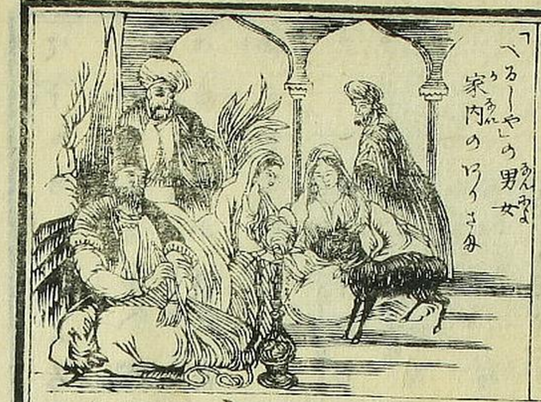
居るよし

○遼留社ハ舊國おもとも元来人氣粗く政事向暴虐ふし

て下々の取扱よろしからざる中く國の力次第ふ衰へ當時ハ至てハ文武とも ふ引立を千八百十三年文化十年千八百二十八年文政十年一年魯西亞と戰ひ両度とも敗北して大ハ土地を失へを近来ハ

世界所謂古國なる
「白洲」
「武西亞」
「波斯」
「印度」
「支那」
「亜細亞」
「亜弗利加」
「亜米利加」
「亜墨利加」
「亜墨利加」
「亜墨

英國と交まて英の士官を雇ひ武備を整るよしあり



「ヘるーや」の男女家内のけいさま

沙漠に二千五百年前
代稱する西域
「蒙古」攻
千五百年前
政府に改

○荒火屋は大國なれども砂漠にて邊土なく廣き砂原あるて且氣候は熱く雨は少く住ふか宜しからさる地あり

「富耳」「亞」の人海に
「亞」の人海に
「亞」の人海に
「亞」の人海に

されども平地は草木よく生長を産物は藥種菓實ごむの類多し獸類は

「荒火屋國」南部

馬駱駝殊ニ「おらび
やの」の馬とてハ既ニ
日本ニも渡セ世界
中の名馬あり此國
ハ風俗いとしく去て
盜賊多きゆへ國の
人々廣き砂漠を越
て旅行するニハ大
勢駱駝ニ乘て武器
を携へて通行する

「蒙古」と「土留古」と堺して西
「亞細亞」の陸の境
「波斯」望めば「阿剌
加」海中に屹立する

とあり

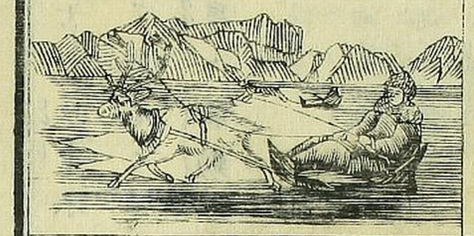
○土留古の領ニハ
「西紅海」ニ臨む地
「韓」ハ「東洲」の北嶠ニ
名高き「百里」
「鉄道」ハ北ニ
「北中海」「亞細亞」

歐羅巴と亞細亞との二大洲を跨る地中海と黑海との間の瀨戸を以て界とせり故に亞細亞の方に位する飛地を亞細亞土留古と云ひ歐羅巴の方に位する本領を歐羅巴土留古と云ふ當時

「阿非利加」「歐羅巴」の中の海を「地中海」「黑海」と亞細亞「亞」を「亞」「亞」「亞」

以て馬の代に用ひ
也又一種の犬あり
これも牛馬の如く
車を引くといふ

馴鹿
橇を
引て
氷を
渡る



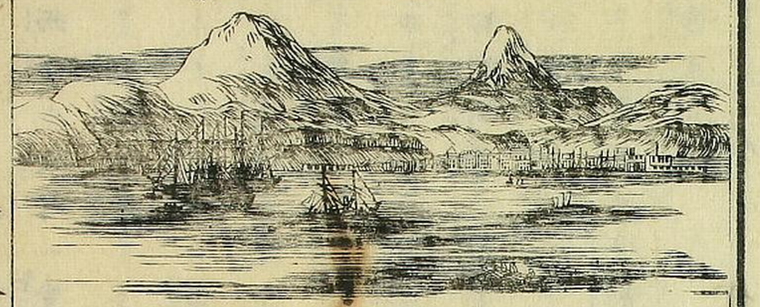
東の俄を「亜米利加」
へ近くして人民の激
戸外に水をのみを「支
那」こまを北を
遠き北極海東西

志邊里屋ハ土地廣
けもとも人少く三
百萬人に過ぎず上人
ハ獵を渡世とせり
又宇良留山の邊に
ハ金銀の山多く魯
西亞の本國より罪
人を移して夥しく
金を堀出すといふ
志邊里屋の産物ハ

一名百條里ハ南北
凡八百里魯西亞の領
地の廣大ハ世界第一
比類なきものなり
紀奉行所ハ西

獸皮あり賣買城の交易ハも皮を以て支那の反物瀬戸物ハ易るといふ

嘉無薩加の港を「べとろぱろすき」といふこの更より東の方魯西亞領の亞米利加へ往来の海上甚だ近し

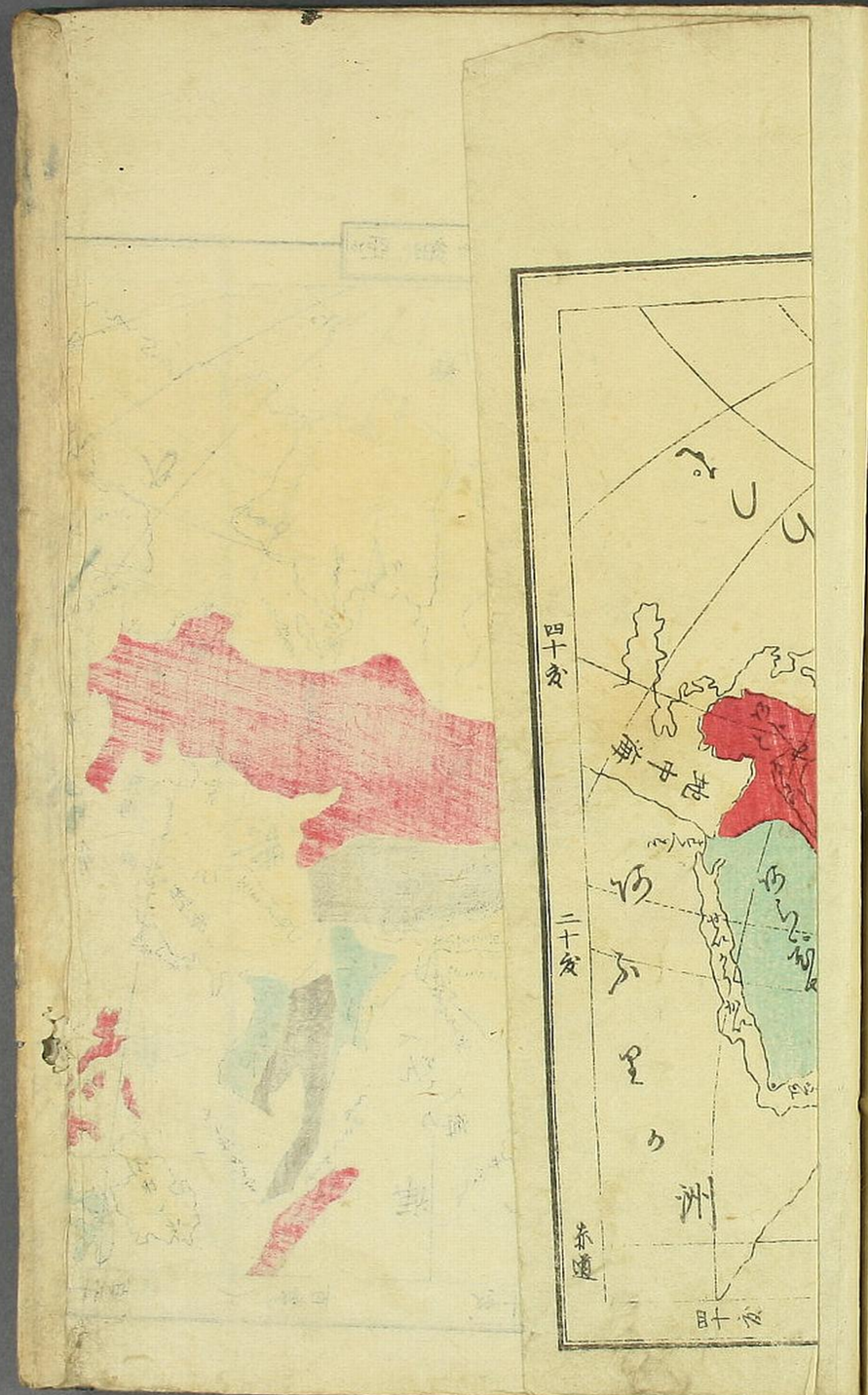


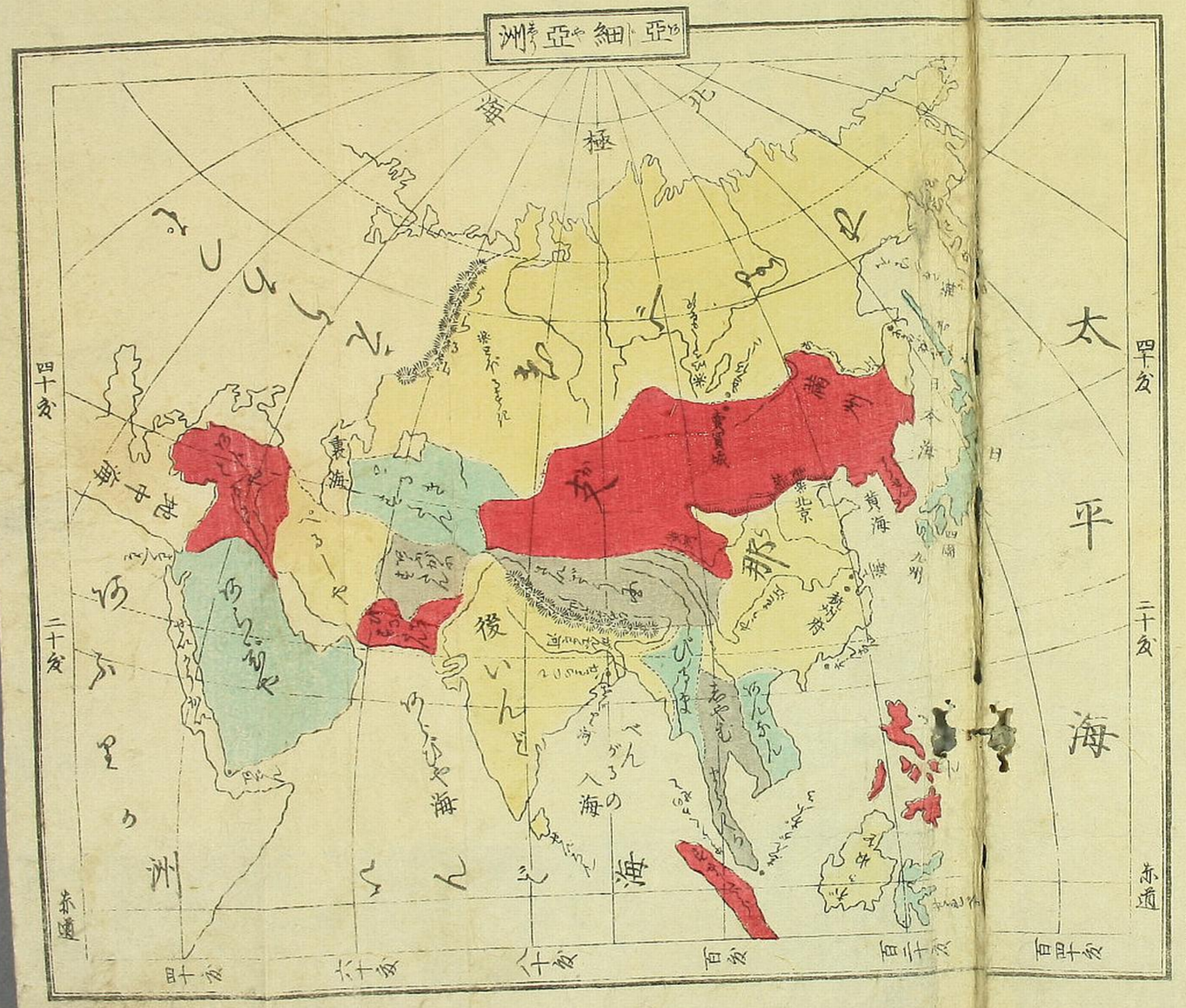
嘉無薩加の景

物産互に易を交易場未だ開港せず「墨西哥」より沿海を建し「仁古来」府我日本の艘来地より幾千萬里の遠

魯西亞の政府ハ昔
より地面を廣くも
ることゝ心掛け近
年ハ又滿州の地を
取て專ら黑龍江の
邊ゝ手を入も軍艦
も始終碇泊し河ゝ
ハ小形の蒸氣船を
浮べて運送の便利
を達せり

國東の海に突出たる「加」
魯加「亞」細亞洲東
はしまりの書





邊ホ手ヒ入キ軍艦も始終碇泊シ河ホハ小形の蒸氣船を浮ベて運送の便利を達セリ

010190533919